

わが歴史体験 ―

奥州・山内首藤氏の滅亡をめぐる

山内 玄人

楽しい哉、自己チュー史学！

今回は研究発表というより私の歴史愛好歴、つまりこれまでやってきた自分のルーツを探求する「自己チュー史学」の楽しさ・面白さについて語りたいと思う。講演ならぬ雑談になると思うがご容赦を。私が歴史にハマって21年、キッカケは1995年の阪神大震災。倒壊寸前となった郷里大阪のわが実家を整理するうち、壊れた仏壇から発見したのが母の実家の過去帳だった。読み解いてみると、その家(栗原家)のルーツは下総国豊田郡石下村(茨城県常総市石下)。去年(2015)9月の鬼怒川氾濫の現場となった農村である。天明の大飢饉(1783)の際、口減らしのため江戸に出された13歳の百姓の子がある旗本に奉公し、遠国奉行だった主人に従って佐渡に9年、奈良に9年と年月を重ね、大和郡山藩士の娘を妻にして、30代で江戸に帰ってきた時には武士になっていたというアメリカンドリームならぬ江戸ドリーム!? 大いに感動してその物語を手作り冊子にまとめ、母方の親戚に配ったのであった。

母のルーツを調べたのなら父のルーツも調べにゃなるまいと、同じく半壊の実家から見つけ出した一冊の本、『葛西氏と山内首藤一族』を読むことになったわけである。母の家は曲がりなりにも武家だったが、父の先祖は山伏とも神官とも聞くので、こちらは簡単に済むだろうと思ったら大間違いだった。ついでに言うなら4年前の例会で発表し『さがみの風2』にも載せた「三河武士金田氏と千葉大系図の謎」は、母方の祖母の実家を調べた「自己チュー史学」の第3弾というわけだ。

では父の先祖、奥州(宮城県)の山内首藤氏の話を始めよう。

みちのくの戦国史

初めて『葛西氏と山内首藤一族』を読んだのが今から20年前(1996)。この書こそわが「自己チュー史学」の原点とも言える。執筆当時は高校教師だった宮城県の郷土史家、紫桃正隆(しとう・まさたか)氏が1964年に出版した処女作で、戦国初期の永正年間、陸奥国桃生(ものう)郡(現在の宮城県石巻市北部)二十四郷を領した山内首藤氏が、同じく石巻の日和山を本拠に桃生郡の南、牡鹿郡を支配した葛西氏との戦いに敗れ、滅び去るというローカル戦国史。「永正の合戦」と呼ばれ、この地方であった最大の戦いを語った書であった。

時の桃生・山内首藤氏の当主は十一代?の貞通。一方の葛西氏十三代宗清は伊達氏(福島・伊達郡)からの養子、よそ者の支配が国衆たちの反発を招いたのかもしれない。合戦は永正八~十二年(1511~15)の三次に及び(二次とする説もある)、敗れた山内首藤貞通は出家して高野山に入ったとも。貞通を継いで二次・三次合戦を戦い敗れた若き武将、千代若丸(知貞)の亡命先は諸説があって定ま



中島城址（稲荷神社）

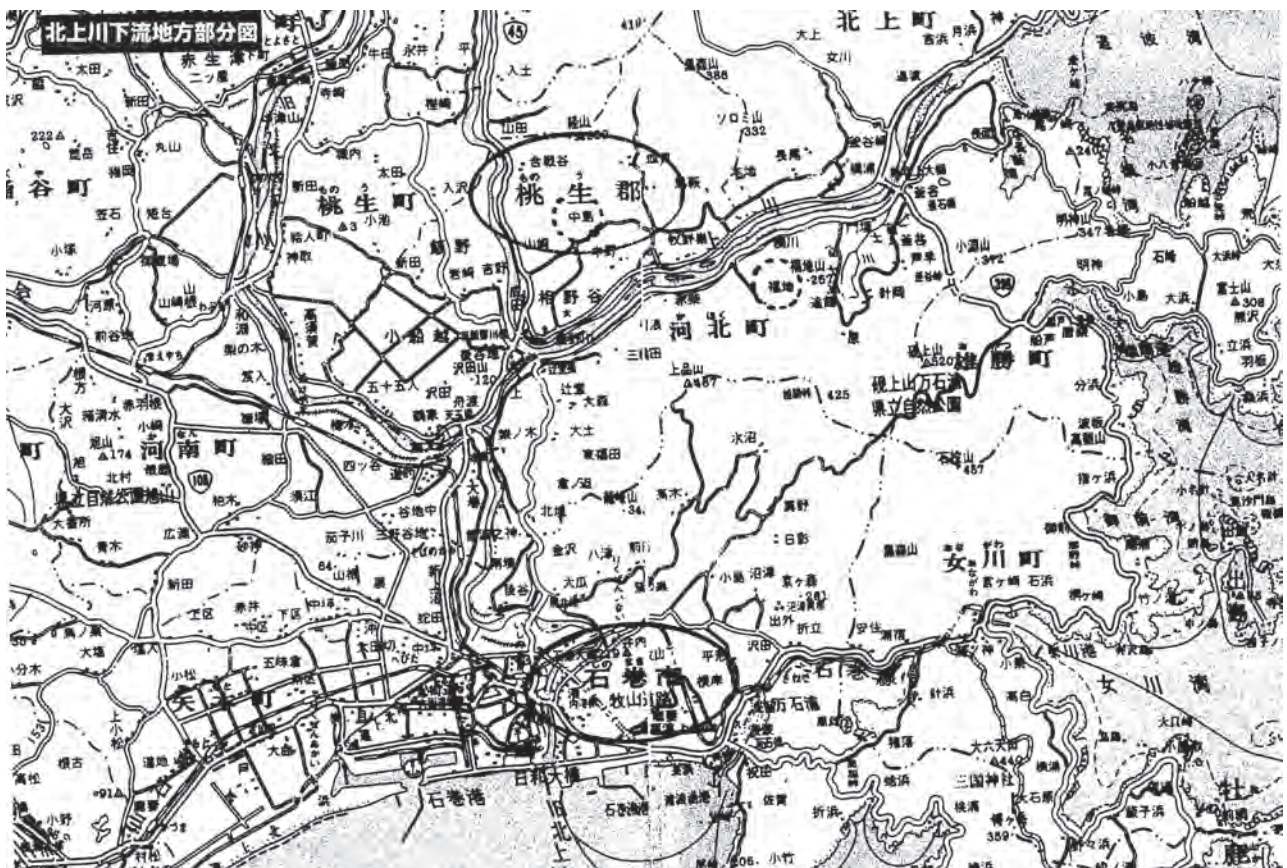


七尾城址と北上川

らない。

そもそも桃生郡は文治元年(1189)、源頼朝の奥州藤原征伐に従軍した鎌倉御家人、山内首藤経俊(つねとし)に功賞として与えられ、以来その後裔が地頭として支配していた。同じく石巻の葛西氏も武蔵国葛西郡(東京・江戸川区)に居た秩父平氏で、藤原征伐で活躍の後、頼朝から奥州総奉行に任ぜられた葛西清重の後裔であった。なお石巻市は東北の大河旧北上川の河口に面し、2011年の東日本大震災では津波で2000人余の死者を出した最大の被災地である。

さらにこの合戦で山内首藤方に同盟した、桃生の北、登米郡の登米氏(新田小野寺氏)は、平安後期に別れた山内首藤氏の支族で、下野・小野寺邑(栃木・岩船町小野寺)をルーツとしていた。同じく西に面する深谷荘(東松島市)の長江氏は、大庭御厨(神奈川・藤沢市)を開発した鎌倉権五郎の曾孫で、三浦・葉山の長柄(ながえ)に居た長江義景の後裔で、それぞれ藤原征伐でこの地を得たらしい。…と言えば皆さんにも少しは興味を持ってもらえるだろうか? 牡鹿郡に加えて桃生郡と登米



『水軍 福地左馬之助一族』扉の地図に加筆

郡、深谷荘を獲得した葛西氏は、陸前の大大名となるのである。

桃生・山内首藤氏の滅亡は今からおよそ 500 年前。ちなみに相模では、北条早雲が玉縄城を築いたのが永正十年 (1513)、三浦道寸が油壺の新井城で滅ぼされたのが永正十三年 (1516)。陸奥では戦に敗れても大将は亡命すれば許されたようで、子孫にとってはラッキーだったのかな？。

奥州を代表する大名の一つとなった葛西氏だが、やがて豊臣秀吉の小田原攻め (1590 年) への不参により奥州仕置で滅ぼされ、江戸時代を通してこの地は仙台藩伊達氏の支藩となった。だから葛西氏はともかく、山内首藤氏など地元でも忘れられた存在で、この書『葛西氏と山内首藤一族』は当地の戦国時代を発掘した名著と評価され、紫桃氏はやがて宮城県屈指の郷土史家となったのである。

さて、私の祖父山内不二門は慶応二年 (1866) に桃生郡中島村 (石巻市河北町中島) にあった修験院の子として生まれ明治 30 年に東京に出た。調べて分かったことだがその修験院の名は「宝珠院」。山内首藤氏の菩提寺と伝わる「天星寺」の隣に今も痕跡が残る。先祖は遅くも江戸初期からの修験者で、祖父の父新平 (法名玄順) が十五代の法印であった。そして当地 (旧桃生郡周辺) には今も山内さんと首藤さんがやたらに多く、どうやらわが山内家も滅亡した山内首藤氏の末裔と考えても間違いなさそうだ。

ちなみに著者の紫桃氏も山内首藤氏の末裔で、葛西氏が滅ぼされた時、その家臣であった首藤氏 (葛西氏家老にも首藤氏が居たようだ) が、追手から逃れるために紫桃と改名したのではないかと想像しておられるが、首藤 (当地の読みは「すとう」) も「しとう」も東北弁なら「すとう」だろう (笑)。

平安・鎌倉期の山内首藤氏

紫桃氏の書を通じて初めて、私は山内首藤氏が鎌倉武士だったことを知ったのだが、この書執筆の時点では紫桃氏も平安・鎌倉時代の山内首藤氏をよく知らず、書の中ではほとんど触れられない。ローカルな陸奥の戦国話よりも私の興味は先ず平安・鎌倉時代に向かった。それ以来日本史や『平家物語』『吾妻鏡』などを読み漁り、山内首藤氏についての知識を蓄えていったのである。

山内首藤氏の文献史料上の初見は『奥州後三年記』(後三年の役・1083～87年)に「將軍(源義家)のことに身親しき郎等」として現れる 13 歳の若武者「藤原資通」(すけみち)である。やがて資通は豊後権守に任じ、源為義(義家の孫、頼朝の祖父)の傅(めのと、乳母の夫・養育係)を務めた。これに始まり、山内首藤氏は代々源氏御曹司の傅を務める譜代の家人であった。その後の保元の乱(1156年)にも「山内首藤俊通」(資通の孫、頼朝の傅)とその子「滝口俊綱」が活躍し、平治の乱(1160年)で俊通・俊綱父子共に討死したことが『保元物語』『平治物語』に記される。なお「滝口」とは天皇のガードマンで、今



將軍の下知を兵に伝える藤原資通 (『後三年合戦絵詞』より)

ならさしづめ皇宮警察。山内首藤氏の子息は若い頃、皆滝口の武者を務め「滝口」を名乗る。

平治の乱の大將、源義朝(頼朝の父)は平清盛に敗れ、東国へ落ち延びる途中、尾張国で側近の「鎌田正清」(政家)と共に長田忠致に謀殺されてしまったが、この鎌田正清も義朝の乳人子(めのと子)で首藤氏の同族。俊通の従兄弟にあたる人物である(『山内首藤系図』等)。

俊通の三男で、後に奥州・桃生郡の地頭職を得ることになる「山内首藤経俊」も頼朝の乳人子でありながら、頼朝の挙兵(1180年)に際しては平家方の大庭景親に従い、石橋山で頼朝を射た罪で危うく梟首されそうになった人物だった。経俊の命を救ったのは頼朝への母(頼朝の乳母、山内尼)の嘆願だった。ただし領地の「山内荘」(北鎌倉・横浜戸塚区・栄区など)は没収されてしまった。藤原資通以来の源氏と山内首藤氏の深い関係を、山内尼が涙ながらに語る『吾妻鏡』の「治承四年十一月二十六日条」は、まるで山内首藤氏を紹介するための条といった趣で、わが自己チュー史学にとってはありがたい限り。

さて、その後許された経俊は源平合戦の後、伊勢・伊賀両国(三重県)の守護に任ぜられたが、頼朝亡き後、伊勢・伊賀の平家残党が一斉蜂起した「三日平氏の乱」(1203年)に、多勢に無勢で逃走したため、守護職を罷免されてしまった。この「経俊」の名だけをご記憶願いたい。この先もたびたび登場するし、史上最も知られた山内首藤一族なので…。

山内首藤氏の足跡を歩く

北鎌倉駅周辺の地名は今も「山ノ内」。この辺りを南端として横浜市戸塚区・栄区の大部分が「山内荘」で、源義朝(頼朝の父)が留守中の鎌倉を守る代官としてここに首藤氏を置いたと、通説では考えられている。私自身はもっと古く、義家の時代からではないか?と考えるのだが…。山内荘は頼朝に没収されてしまったが、「山内」の姓は今も子孫に伝わるというわけだ。

なお、あじさい寺で知られる北鎌倉の明月院には、関東管領山内上杉憲方の墓とされる鎌倉最大のやぐら(岩窟)があるが、寺では開基を山内首藤経俊とし、このやぐらを経俊が平治の乱に討死した父、俊通の菩提を弔って作ったとしている。まだその時代には、やぐらを墓とする風習は無かったはずだが…。

山内荘を失った山内首藤氏だが、経俊の長子重俊の代には土肥実平の早河荘(小田原市)の一部、一得名(いっとくのみょう・小田原市扇町周辺)に所領を得たようで、その後代々に継がれている(『山内首藤家文書』※後述)。『山内首藤系図』(同文書内)では重俊は、実平の子小早河遠平の二女を妻としており、その関係からと思われる。

わが先祖の地、宮城県桃生郡(当時)へも何度も足を運び、今は他人の家となった中島の宝珠院の裏山に乱立する、先祖と思しき修験者たちの墓碑を調べたり、隣の天星寺(桃生・山内首藤氏の氏寺とされる)の本堂に掛かる書額が、わが祖父の書と知って驚いたり、田んぼの中に浮かぶ山内首藤氏の砦、中島城址(今は稻荷神社)に登ったり、寺の住職や土地の人たちから話を聞いたりもした。山内首藤氏の本城・七尾城は北上川河口の追波川(おっぱがわ)に面した山城で、こちらは眺めるだけにした。

こうして集めた知識と情報をつなぎ合わせ、桃生・山内首藤氏の話を中心に、平安・鎌倉時代の山内首藤氏の活躍、そのまた遠祖とされる藤原秀郷(『尊卑分脈』)あるいは藤原師尹(もろただ・『山内首藤系図』)に始まって、各地に散った同族の話まで、『山内首藤一族』という上下二冊の手作り本

にまとめ、今度は父方の親戚諸君に配ったのが1998年の6月。紫桃氏にもお送りしたがもちろんリアクションはなかった。

桃生・山内首藤氏の元祖は？

山内首藤経俊が桃生郡の地頭職を得たことは理解できたが、最初に桃生に土着した元祖はいったい誰で、それはいつの時代なのか？ 桃生の末裔たちは、奥州藤原征伐の経俊自身が桃生の祖になったと考え勝ちで、多くの首藤家の系図は経俊を祖としている。だが実際には、領地には一族の誰かを代官として置き、鎌倉末期か南北朝の頃、地頭職を継いだその子孫が入部したと考えられる。それが鎌倉武士の遠隔領地支配の通例である。ところが『葛西氏と山内首藤一族』ではその元祖を「名の分からない経俊の末弟」とするのだ。しかし初めて読んだ時から私は直感的に、これは違う！と思った。その説はある首藤家に残された系図が記すところで、紫桃氏はそれをそのまま引用しているわけだ。そしてこの説は江戸時代、首藤知平という人物の考証によるものと分かった。知平はこの首藤家の直接の先祖ではないが、知平の家が絶え、なぜかその系図や史料がこの首藤家に伝わったものらしい。実はその説は『伊達正統世次考』（仙台藩主四世伊達綱村が編じた伊達氏歴代記、1703年完成）にも、「桃生郡北方は首藤刑部丞俊通が末子を封ず」として記され、山内首藤氏の滅亡についても触れている。後になって首藤知平が伊達綱村の祐筆であったことを知った。おそらく知平は『伊達正統世次考』の編纂にも参画し、この部分は知平の筆によるものと推定できる。

知識ある知平は、経俊が奥州藤原征伐の頃、伊勢・伊賀国の守護だったことを『吾妻鏡』で知っている。また『尊卑分脈』（室町期編纂、源平藤橘の大系図集）には、俊通の子として「経俊・俊綱・俊秀」の三兄弟が記されるが、俊綱が平治の乱で討死し、その弟俊秀は園城寺の僧兵で、以仁王と共に討死したことも『平治物語』『平家物語』で知っている。ただし知平の時代、手に入る史料はこれだけである。兄弟の誰もいないならばと知平は、経俊自身の桃生入部説を否定する意味で「名前のわからない経俊の末弟」を考え出したに違いない。（※余談、通説では経俊の兄とされる「俊綱」は実は弟で、平治の乱では死んでおらず、園城寺の僧「俊秀」は『平家物語』が創造した人物であることを、後に私は発見している。）

もう一つの史料に『余目（あまるめ）旧記』がある。奥州総奉行に任じた葛西清重に次いで、頼朝から「奥州留守職」に任ぜられたのが伊沢家景。その後裔は留守氏と称し宮城郡（塩釜市・多賀城市・仙台市西部）に土着していたが南北朝期、奥州にも波及した観応の擾乱（1351年）に巻き込まれ壊滅状態となる。『余目旧記』（余目氏は留守氏の支族）は、その時討死した四代当主の留守家助が、桃生・山内からの養子だったと記す。山内首藤氏は遅くもその頃には桃生に定着し、留守氏とも昵懇であったことが想定される。

紫桃氏の書の影響もあって「名諱不明の経俊の末弟」土着説は今日も当地に広まっている。紫桃氏はその後幾つもの書を上梓されたが、桃生・山内首藤氏の祖については相変わらず「名諱不明の末弟」である。江戸時代とは異なり、今はさまざまな情報や資料が簡単に手に入る時代。できることなら桃生・山内首藤氏の元祖を自分の手で探し出したい、と思っていた。

備後・山内首藤氏と山内首藤家文書

山内首藤経俊の子孫の多くは、実は備後国の地毘荘（じびのしょう、「毘」の字は正しくは田ヘン

に比のツクリ)という、広島県北東部(庄原市)に移り栄えているのだ。この地は経俊の孫(長子重俊の二男)の宗俊が、承久の乱(1221)の功賞として得たと聞く。その子孫たちが移り住み、隣の安芸国吉田郡(広島県安芸高田市)の毛利元就とも交流があって、元就が残した文書にも現れる。だがやがて毛利藩に吸収され、関ヶ原合戦(1600)の後には共に長州(山口県)に移ったようだ。

この備後・山内首藤一族には大量の古文書や詳しい系図が残されていて、それは東大史料編纂所が管理・刊行する『山内首藤家文書(大日本古文書・家わけ15)』として、今は誰でも見ることができる。史学者にも重用されるが、これが無ければ私のルーツ探索も出来なかったであろう。

その中に、本来の嫡流とみられる俊業(重俊の長子)の系に「桃生郡吉野村」が代々相続されている記録があるのだ。だが俊業が弟の宗俊と違い、承久の乱で京方につき誅されたため、あるいは子孫に女子が続いたためか、宗家は宗俊の二男、時通の系に移り、相続領地の桃生郡吉野村もやがて文書から消えている。しかし時通系や俊業系の子孫たちは備後で暮らし、誰も桃生に下った形跡はない。それに吉野村は桃生郡のごく一部で、俊業系は桃生郡だけでなく地毘荘の一部や他国の所領も継いでいる。

これはたまたま俊業系の相続文書だけが残ったのであって、おそらく桃生郡は、経俊の子等兄弟たちに分割相続され、俊業以外の誰かの家が桃生郡の総地頭となり、その後裔の誰かが桃生に下ったに違いない。それは誰だろう?と、膨大な系図に何度も目を凝らすのであった。

なお、地毘荘があった庄原市には「山内町」があり、JR芸備線に「山ノ内」駅がある。備後山内首藤氏の存在の名残である。一度訪ねたいと思っている。

会津にも山内氏が

桃生と同じ奥州だが、山内首藤氏の後裔は会津(福島県)にも居た。戦国時代の会津といえば、黒川城(後の会津若松城)を居城とし、伊達政宗に滅ぼされた蘆名氏(三浦氏・佐原義連の後裔)が知られるが、山内氏はその蘆名氏の家臣となり、只見川上流域の会津郡伊北郷(大沼郡金山町他)を支配していた。蘆名氏滅亡後も生き残ったが、やはり秀吉の奥州仕置によって滅ぼされたようだ。この地も藤原征伐の際、頼朝に従った三浦氏や山内氏が得たものらしい。会津には他に小山氏や結城氏の後裔も居たようだ。

ただし備後の『山内首藤家文書』には「桃生郡吉野村」の相続は記されるが、会津についての記述は一切ない。なお会津では「山内」を名乗るか地名の「横田」を姓とする一族が知られ、「首藤」を称した者は居なかったようだ。

この地の山内氏は経俊の末子(六男)経基(経元とも)を祖とすると聞いていた。経基は経俊の子の中でただ一人『吾妻鏡』に登場する人物である。それは有名な事件で、経俊が罷免された後、伊勢・伊賀の守護職を継いだのが義光流源氏の平賀朝雅。ところが元久二年(1205)、執権北条時政の後妻牧の方が、将軍実朝を廃して娘婿の朝雅を将軍に据えようとした陰謀が発覚(牧氏の変)。時政と牧の方は北条義時によって伊豆に配流され、平賀朝雅は京から逃亡の末、伊勢国・松阪で討ち取られた。朝雅を討って勇名を馳せたのは、何と経俊の末子(六男)でまだ元服前の持寿丸(後の経基)だったのである(『吾妻鏡』)。その経基が元祖だと判る、会津山内氏を羨ましく思っていた。

会津出身、山内利三氏のこと

横浜に住む姉から、神奈川新聞に『鎌倉御家人の系譜－山内首藤氏の周辺』（山内利三著）という本の書評が載ったことを知らされたのは1999年のこと。発行元の出版社に電話すると「町田では売ってないから郵送しましょう」と。住所を伝えると「ところであなたはどちらの山内さんで？」、ハア？今住所を言ったのに…と思い、ハッと気が付いて「あ、桃生の山内です」。すると「桃生はいいですね、元祖が判るから…」。電話の相手は著者の山内利三氏その人だったのである（笑）。そして利三氏は会津出身だったというわけだ。それにしても元祖が分からないのは桃生の方で、会津山内の元祖は経俊六男の経基のはずだが…？

その書を一読した上で、藤沢・鶴沼の利三氏宅を訪ね語り合うことになった。桃生の元祖について尋ねると、利三氏が貸してくれたのが『金山町史』（1974年刊）。金山町は利三氏の郷里であり、会津山内氏の本拠があった地である。

『金山町史』の山内首藤氏

『金山町史』（高橋富雄著）によれば、会津山内氏の元祖については桃生山内氏以上に史料がない。問題の「経基（持寿丸）元祖説」は複数の系図が伝えるが、それらすべては江戸期作成のもので、経基自身が父経俊と同じく奥州藤原征伐に参戦したとするナンセンスなもの。持寿丸はその頃また生まれてなかったかもしれないのだ（笑）。

また各地の山内首藤氏についても『金山町史』は大変詳しく、備後や桃生の一族についても多ページを割いて説明している。その「桃生山内氏」の項の中にこんな一文があった。

秋田藩採集文書の文永九年（1272）四月九日付関東下知状に、文応元年（1260）、山内中務三郎経通が、陸奥国府近くの八幡庄（多賀城市八幡～仙台市宮城野区）の争論にあたり事情聴取に派遣されていることが注意される。このような場合の現地派遣には、通例近隣の地頭で事情に明るいものが選ばれる。山内経通は、おそらく宮城郡の隣郡たる桃生郡に所領を持つ地頭としてその任に選ばれたものであったと思われる。
（高橋富雄著『金山町史』より）

これかあ、利三氏が桃生の元祖は判っていると言ったのは！「山内中務（なかつかさ）三郎」なら『吾妻鏡』寛元四年（1246）八月十五日条に、鶴岡八幡宮の放生会に將軍の車に供奉した一人として見える。この中務三郎の名が「経通」であることを初めて知ったわけだが、「経通」なら『山内首藤系図』には、経俊の曾孫（孫とする系図は間違い）の一人として見える。その添書きには「文永二年（1265）京都にて死去」とあり、これは公務出張中のことだろうが、経通自身が桃生に土着していないことは確かだ。経通が桃生の総地頭だとしても、桃生に定着するのはその子孫の誰かであろう。『山内首藤家文書』や系図を点検したが、経通の兄達（時通・清俊）の子孫は備後にいるが、経通の子孫が備後に移った形跡はない。

さらに、桃生の二軒の首藤家に伝わる系図（『葛西氏家臣団辞典』紫桃正隆編）では、揃って経俊を初代とし二代目を「経通」としている。このことも「中務三郎経通＝桃生郡地頭職」説の傍証にはなりそうだ。経俊・経通以外は全く異なる怪しげな二つの系図だが…。

なお『秋田藩採集文書』とは、秋田藩主三代の佐竹義処（よしずみ）が佐竹家譜編纂の一環として、

藩士から家蔵の古文書や記録類を提出させ編纂した大古文書集。その原文を東大史料編纂所で私も見ることができた。

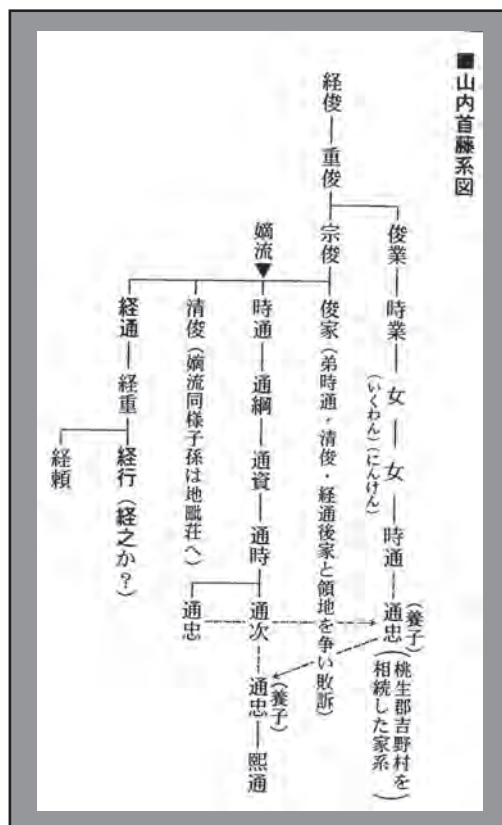
『高幡不動胎内文書』の山内経之

その頃、東京・日野市が刊行した『日野市史史料集・高幡不動胎内文書編』(1995 発行)という本を知った。その内容は高幡不動(金剛寺)の本尊、不動明王像の胎内から発見された古文書を調査・解読したもので、それは南北朝の頃、この近辺の土淵郷(日野市日野本町辺り)の地頭だった「山内経之」という武士が「常陸合戦」(1338～43年・関東管領の高師冬が、常陸小田城に陣した南朝方の将、北畠親房を攻略した合戦)に出陣し、戦地から家族に宛てた数々の手紙の類だった。

山内経之なる武士が日野周辺の地頭であったことが初めて知られ、研究者たちは経之を山内首藤一族と推定。土淵郷にいた武蔵七党の一つ、西党の日奉(ひまつり)氏が北条氏の被官であったため共に滅び、替って山内氏が地頭として入ったと見ている。さらに『山内首藤系図』に見える「経之」と同音の「経行」という人物に注目。また手紙の文中に「おく(奥)にまかる」という文言が数度見えることから、

経之は奥州山内首藤氏で、桃生郡にも所領を持っていたのではないかと想像している。

これには驚いた! 『山内首藤系図』の「経行」は、『金山町史』の高橋富雄氏が桃生郡地頭と推測した「中務三郎経通」の孫の一人なのだ。年代・年齢的にも大きな矛盾はない。経之(経行)が桃生でなく日野に土着したのは、桃生の所領が狭小だったから、つまり経之は経通の庶流の孫だったのでは? なお常陸各地を転戦中に手紙は尽き、『日野市史史料集』は経之の戦死を想像している。山内氏は没落し、日野の土淵郷から姿を消したと見られているが、遺族は旧領の桃生に戻ったのかもしれない。



「歴史研究」誌に論文発表

『吾妻鏡』と『秋田藩採集文書』、それに備後の『山内首藤系図』、さらに東京・日野の『高幡不動胎内文書』を重ね合わせて見たら、陸奥・桃生郡の総地頭として山内首藤経通(経俊の孫宗俊の三男)の家が浮かび上がったのである。日本中のあちこちに貴重な情報が散らばっていた! これだから自己チュー史学は面白くてやめられない。

この話、論文にまとめてやろうと書いたのが「高幡不動胎内文書と陸前・山内首藤氏」。『歴史研究』誌に掲載されたのが2001年の2月号。もっと早くに完成していたのだが、当時、山内首藤氏について調べるうち通説の間違いや新事実の数々を発見。それらを数本の論文にまとめ、『歴史研究』誌にデビューしたのが、山内利三氏との議論から生まれた「謎の武士・山内先二郎と山内荘」(2000年9月号)だったから、半年に一本くらいじゃないとボツにされる、と投稿を遅らせた覚えがある。その掲載誌を、大きなヒントとなった『金山町史』を貸してくれた山内利三氏に送ったのだが、返ってきたのは「父は亡くなりました」という、息子さんからのハガキだった。

当然『葛西氏と山内首藤一族』の紫桃正隆氏にも送った。「桃生の元祖＝経俊の名諱不明の弟」説に固執する紫桃氏に送るのはケンカを売ることになるのかな？とも思ったが、今度は丁寧なハガキが返ってきた。曰く「素晴らしい論文です。私の次の作品でぜひ紹介したいが、私も齢八十を超えたので間に合うかどうか…。何と、お世辞でも嬉しいではないか！

自信も得た私はますます歴史にハマリ、神奈川歴研に入会したのはこの論文「高幡不動胎内文書と陸前・山内首藤氏」が掲載されたちょうど1年後、2002年2月のことであった。

わが論文、紫桃氏を啓蒙！

突然の紫桃氏からの電話に驚かされたのは確か2004年の春頃だったろうか。「近々出版する著書に、貴方から頂いた論文を紹介したいのだが…」「え、ホントですか！」。こうしてその夏に出版社から送られてきたのが『水軍・福地左馬之助一族』(2004年7月発行)。「福地」とは馴染みのない姓だがこれも山内首藤一族。紫桃氏と同じく追波川(北上川河口)のわが家のルーツ中島の対岸、南岸の「福地」に住み、葛西氏の家老を長く務めた家である。

早速ページをめくったら、あった！「最近山内玄人氏の論文『高幡不動胎内文書と陸前山内首藤氏』を読み、大いに蒙を啓かれるものがあった。」ですと！そこまで評価されるとは、擦ったい思いである。さらに『桃生郡史』などには「経俊—弟俊経—経通」と継続させたり、「経俊の末弟、あるいは四弟」と書いたり様々だが、いずれも信ずるに足りない。」と、これまでのご自身の説を葬り捨てておられる。

紫桃氏は宮城県でも権威ある郷土史家、特に山内首藤氏については…。この本が広く読まれることで桃生の歴史が変わるかもしれないのだ。初めて『葛西氏と山内首藤一族』を読み、山内首藤氏の研究にハマったのが1996年、以来8年にして研究は一つの成果を見たのである。嬉しくなってその年の秋、私は追波川南岸に紫桃氏の自宅を訪ね初めてお会いしたのだが、それから4年後の2008年の暮、87歳で紫桃氏は亡くなったのであった。『水軍・福地左馬之助一族』は紫桃氏の最後の作品となったのである。

桃生・山内首藤氏とわが先祖

葛西氏と戦って敗れた山内首藤氏を紫桃氏は「中島系」と呼び、追波川南岸の「福地系」山内首藤氏は古くから葛西氏の家老を務めた別系、と考える(私はこの説には与しないが…)。そして敗れた最後の「中島系」の当主、知貞(千代若丸)はどこへ消えたかと語る。だがわが先祖の修験院はその「中島」にあったのだ。「中島の山内」ならここに居ります！と言いたくなるではないか。それに中島周辺にも山内家は数軒あるが「やまのうち」と読むのは我が家だけ。他は全て「やまうち」なのだ。その頃から私は、今度は身近な先祖、中島の修験院「宝珠院」のことを調べ始めた。すると思いがけず、不思議な縁で知り合った多くの方々のご協力があって、驚くようなことが次々に判ったのである。

『桃生・山内首藤氏と板碑』などの著書もある石



宝珠院跡の墓地

巻の板碑研究家、勝倉元吉郎氏には宝珠院の墓地に同行願い、34基におよぶ墓碑の刻字を解読していただき、また地域に残る宝珠院の法印が建てた数々の板碑や供養塔を案内していただいた。また『歴史研究』誌に「古文書講座」を連載中の、同じく石巻の庄司恵一氏からは、何と宝珠院の十四世法印だった高祖父(法名恵海)や十五世の曾祖父(法名玄順)の、肉筆のコピーやその解読文を送っていただいた。他にもいろんな方々にお世話になったのである。

さらに、地元の『宮城県史』や『河北町誌』などに、さまざまな宝珠院の記事が載ることを知った。それらも読んで、判ったことを幾つか述べると…、

仙台藩では上級の修験者が武士とされたこと。宝珠院でも明治初年の戊辰戦争には実際に曾祖父が出陣したらしい。従姉が聞いたという祖父が語った幼時の思い出話「私は家を出ようとする父の刀にすがって泣いたものだ」にも合致する。その修験者隊の一つの名が「飛行隊」だったというから笑われる。

わが家だけが「やまのうち」で他の家がすべて「やまうち」なのも、名字帯刀が許された修験者と違い、一般庶民は江戸時代、名字が名乗れなかったから、読みが分からなくなってしまったのであろう。

驚いたのは宝珠院の不思議な伝説が中島村周辺に伝わっていたこと。修験者は村に病人が出ると枕元で祈祷もするが、山内法印は不思議な鬼面を持っていて、病人の顔に被せるとたちまち全快し、しかも面はひとりで「山内法印屋敷」に戻って行っていつもの場所に収まっていた(『わがふるさとの町飯野川』)、と言うもの。修験者は祭りの日には法印神楽を舞うので当然、いろんな面(おもて)を持っていた。

さらに河北町の役場から、最古の我が家の原戸籍(明治初年)を取り寄せた。いろんなことが分かったが、高祖父(曾祖父の父)十四世法印恵海の俗名は「元貞」だった。待てよ…、山内首藤氏最後の当主は「知貞」、その父は「貞通」。「貞」の通字が続いていたのか? それにしても「ともさだ」と「もとさだ」とは! ……もしや桃生山内首藤氏の宗家は我が家ではないのか!? 私の名は「もとひと」だけど…、これは関係ないか(笑)。

< 完 >

